

<再録>

1) 文献の調査・収集の基準と方法

文献の調査・収集は、本調査を実施した1989年5月の時点で筑波大学大学院博士課程に在籍した木村勝彦氏と木村健一郎氏を中心に、同じく当時筑波大学人間学類4年の福原さゆりさん、神山知子さん、静岡大学教育学部3年の岩井明美さんの協力を得て、次のような手順で進めた。

- ①『教育図書総目録』（教育図書総目録刊行会）より調査雑誌の基本リストを作成。
- ②加えて、新たに出版されたもの等、必要と思われる教育関係の雑誌をリストに付加。
- ③調査対象雑誌の期間・・・1985年1月号～1989年3月号
- ④調査方法・・・該当期間の雑誌の目次により、次2点を基準に検索
 - (a) 表題の中に「生活科」の文字が入っていること
 - (b) 著者が特定できること。
- ⑤雑誌は筑波大学中央図書館と同教育学系図書室ならびに国立教育研究所と都立教育研究所に所蔵されているものを使用。

なお、当初は教育関係という概念をかなり広くとり、各種総合月刊雑誌、主要週刊誌、教育学・心理学関係を中心とする学会発行の雑誌、教育関係新聞、朝日・毎日・読売新聞等も視野に入れ調査した。しかし、報道記事や学習指導要領改訂全体に関する論評等は数多く見られたが、上記の④の基準に合う論文はほとんど見られなかった。そのため、調査途中から検索雑誌リストを修正し、資料編の「凡例」に記した文献に限定した。

また、調査期間を1985年1月号から1989年3月号とした理由は次のとおりである。

「生活科」はその名称が、仮称としてではあるが初めて正式に登場したのは、1986年7月29日に出された「小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議、審議のまとめ」であった。但し、低学年社会と理科の統合・改廃に関する論議は現行の小学校学習指導要領改訂時からあり、また臨時教育審議会においても種々論議されていた。そのため、上記の「審議のまとめ」に先立って「生活科」という言葉が使われていないかどうかを確かめる意味もあって、約1年間の余裕を見て、スタートを1985年1月とした。

他方、平成元年度の『小学校学習指導要領』が公布されたのが3月であるため、一応、「生活科」誕生までの論考という意味で、1989年3月で終わることとした。

2) 分析の観点

以上の手順で得た生活科に関する雑誌文献を舞台とする4年間の論議の分析を次の4組の観点から進めた。

(1) 全体の量的な傾向

対象とする生活科に関する論考は全部で649点。形式的には10数ページの論文から400字に満たないものや座談会・シンポジウムの記録まで含まれていた。内容も生活科を推進、歓迎するものから絶対反対まで多種多様であった。そのため、649の論考を、①掲載雑誌、②発行年月、③作者の属性等で量的に分類することから、生活科論の全体としての傾向を把握した。

(2) 教科の立場からの論点

生活科は社会科と理科が合わさったのではなく新たな原理に基づく教科であるとされる。だが、統合か廃止かは別として、生活科が小学校1年時と2年時の社会科と理科に代わって設置される教科であるという事実は否定できない。3分の1が改変される小学校の社会科と理科という教科にとって、生活科の存在は極めて切実な問題となる。他方、現場の教師が生活科に関して最も知りたいことは従来の社会科や理科とどのように異なるのか、という点。実際に授業を構想する上で、先ず手がかりとなるのが社会科や理科との比較であろう。

そこで、生活科論の内容分析を、「生活科とは何か」という一般的論議ではなく、社会科と理科それぞれが「生活科をどのように捉えたか」という観点から始めた。そしてその上で、教科を合わせる立場（合科）や教科とは異なる立場（統合や総合）からの生活科論に注目した。

(3) 生活科を実施・推進する立場からの論点

生活科の全面実施まで3年ある時点での調査であったが、準備を進めている学校も少なくなく、論から実践の段階に移りつつある学校もあった。だが、その数は全国24982の小学校の何パーセントに当たるか。全国の大多数の先生方にとって生活科は未だ雲をつかむような話しとっては言い過ぎであろうか。

当時、文部省は、現行の小学校学習指導要領においても生活科への芽が既にあり、それが低学年における内容の取り扱いとして記された合科指導であるとした。だが合科指導を日常的に実施している小学校は少ない。他方、生活科は全国の小学校で必ず実施しなければならない教科であった。このことは、組織的な戦略・戦術の問題や各種条件整備等、教育論上の問題以外の課題も含めて生活科論を検討する必要があることを示唆していた。その意味で国・県・市町村の教育行政、学校、教師……と、それぞれの立場においてどのような課題や方法が提示されているか。この点に焦点を合わせながら生活科自体の課題についての考察も視野においた。

(4) 私の個人的な生活科論によるバイアス

上記(1)～(3)の視点からの分析の前提に次のような私自身の生活科に対する評価があることを明記しなければならない。

- ①生活科は社会科と理科に代わるものではなく、社会科本来のあり方が問われているものとして考える。
- ②その意味で、生活科を学校教育の改革の入口と考える。
- ③従って、生活科を積極的に進める立場から分析する。
- ④但し、それは賛否いずれにせよ現行の論議をそのまま認めるわけではなく、生活科を実地する上での課題を探る立場から論じる。
- ⑤私自身の生活科論は本稿の末尾に明記する。

資料編「生活科」に関する文献目録

編集 馬居政幸（静岡大学助教授） 木村勝彦（筑波大学大学院博士課程在学）
木村健一郎（筑波大学大学院博士課程在学） ※所属は1989年当時

(1) 著書

〈凡例〉 1) 直接「生活科」に関連して著された本に限定した。

2) 発行年代順に配列した。(1989年5月まで)

- ・益地勝志・山の口小学校共著『小学校低学年授業の新構想—生活科への移行をめざして—』（初教出版、1986年10月）
- ・新潟県上越市立大手町小学校『雪の町からこんにちは』（日本教育新聞社、1987年1月）
- ・新福裕子編著『小学校「生活科」の構想と実践—自己生活力の育成をめざして』（明治図書、1987年3月）
- ・新潟県上越市立大手町小学校『生活する力を育てる教育—続・雪の町からこんにちは【教師編】』（日本教育新聞社、1987年4月）
- ・東京民研編『臨教審「生活科」をのりこえる授業』（あゆみ出版、1987年5月）

- ・平田嘉三ほか『生活科教育を考える』（三晃書房、1987年7月）
- ・笠原始『子どもが力を発揮できる生活科の構想』（初教出版、1987年10月）
- ・益地勝志『生活科単元構成と展開の工夫—個性を生かし生活を豊かにする問題解決の進め方—』（初教出版、1987年11月）
- ・大野連太郎・加藤幸次他監修、清水照行編著『生活科をどうとらえるか』（中教出版、1987年11月）
- ・奥井智久他編『新時代の小学校低学年教育—生活科への実践的アプローチ』（みずうみ書房、1987年12月）
- ・武村重和・梶田叡一他『新教科「生活科」構想と具体化—子どもの生活に根ざした授業づくり』（啓林館、1988年1月）
- ・小佐野正樹『生活科批判と理科教育の課題』（あずみの書房、1988年1月）
- ・梶田叡一編/大阪教育大学教育学部附属池田小学校『生活科の構想と実践』（第一法規、1988年2月）
- ・お茶の水女子大学附属小学校児童教育研究会『低学年教育を創る—一個がかがやく創造活動—』（東洋館、1988年2月）
- ・奥田真丈・牧田章編著『自立していく子どもたち—望ましい自己認識を育てる「私の手紙」—』（ぎょうせい、1988年3月）
- ・歓喜隆司・木下百合子編『生活科の構築』（東信堂、1988年3月）
- ・大野連太郎・加藤幸次他監修、清水照行編著『生活科の学習方法』（中教出版、1988年4月）
- ・日本生活学会編『私たちは「生活」をどうとらえて次の世代に伝えたいか』（群羊社、1988年6月）
- ・福岡教育大学教育学部附属福岡小学校『感動体験を中核とした「生活科」の授業づくり』（明治図書、1988年6月）
- ・益地勝志編『「生活科」単元づくりの工夫』（大日本図書、1988年6月）
- ・今谷順重『新しい問題解決学習の提唱—アメリカ社会科から学ぶ「生活科」と「社会科」への新観点—』（ぎょうせい、1988年6月）
- ・大野連太郎・吉田貞介監修、清水照行編著『生活科の指導計画』（中教出版、1988年7月）
- ・長谷川純三『低学年理科の歴史と「生活科」の展望』（あずみの書房、1988年8月）
- ・渋谷憲一・新潟県上越市立高田西小学校『教育の生活化を図る—生活科の実践と指導計画の編成の工夫』（東洋館、1988年11月）
- ・奥井智久他編著『新時代の小学校低学年教育—生活科への実践的アプローチ—』（みずうみ書房、1988年12月）
- ・高浦勝義『生活科の考え方進め方』（梁明書房、1989年1月）
- ・今谷順重『生活科の授業を創造する』（ミネルヴァ書房、1989年4月）
- ・栗田敦子・津幡道夫・畑中喜秋編著『イラスト生活科 1年』（東洋館、1989年4月）
- ・栗田敦子・津幡道夫・畑中喜秋編著『イラスト生活科 2年』（東洋館、1989年4月）
- ・益地勝志編著『「生活科」授業のすすめ方—移行から授業実施に向けて—』（大日本図書、1989年5月）
- ・佐島群巳・鈴木喜次・武村重和監修『すぐ役立つ たのしい生活科の授業』（中央出版、

1989年5月)

・梶田叡一・加議明編『生活科授業の設計と展開』（国土社、1989年5月）

（2）論文

〈凡例〉

- 1) 論文掲載雑誌の期間は1985年1月号～1989年3月号である。
- 2) 論文掲載の順番は、①「掲載雑誌の発行年月（西暦）」（同月に臨時増刊のある場合は増刊号を後にした）。②「雑誌名・五十音順」、④「著者名・五十音順」の順とした。
- 3) 掲載雑誌において生活科に関する特集が組まれている場合は、その特集名を論文の冒頭に記した。
- 4) 論文名は、原則として、掲載雑誌の目次に記されたものを用いた。副題を記入していない場合もある。
- 5) 論文の検索は、原則として、次に示す雑誌の目次において、①表題の中に「生活科」の文字が入っていること、②著者が特定できること、という2点を基準として行った。そのため、実質的に生活科のことを論じていても論文名に生活科と記されていないため取り上げなかった場合もある。
- 6) 検索雑誌名・五十音順 〈（ ）内は出版社・編集機関〉
 『科教協ニュース』（新生出版）『学習指導研究（研修）』（教育開発研究所）『学校運営研究』（明治図書）『学校教育』（広島大学附属小学校学校教育研究会）『家庭科教育』（家政教育社）『考える子ども』（初志の会）『季刊教育法』（エイデル出版）『教育』（国土社）『教育学研究』（日本教育学会）『教育研究』（初等教育研究会）『教育じほう』（都立教育研究所）『教育展望』（教育調査研究所）『教育方法学研究』（日本教育方法学会）『教職研修』（教育開発研究所）『月刊教育ジャーナル』（学習研究社）『現代教育科学』（明治図書）『児童心理』（金子書房）『社会科教育』（明治図書）『授業研究』（明治図書）『小一教育技術』（小学館）『小学校教育』（教育開発研究所）『小学校時報』（全教図）『初等教育資料』（東洋館出版）『初等理科教育』（初数出版）『生活教育』（民衆社）『総合教育技術』（小学館）『Part H』（連続セミナー授業を創る）『理科教育』（明治図書）『理科教室』（国土社）『理科の教育』（東洋館出版社）『歴史地理教育』（歴史教育者協議会）

1987	八	星野清一	合科的指導の研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	永島俊之・藤本素雄・青木公雄	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	星野清一	合科的指導の概念とその意義	理科教室	19 15	12	1987	八	渡辺徳雄	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	星野清一	合科的指導の概念とその意義	理科教室	19 15	12	1987	八	教育研究	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	高岡浩一	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	小林毅夫	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	土屋 暢	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	高江洲和子	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	幡野知代	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	山口令司	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	大西秀彦	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	野崎 彰	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	外山 彰	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	川合 章	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	三枝孝弘	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	友野重紀	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	朝倉隆太郎	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	熱海則夫	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	有園 裕	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	家光大蔵・久故博隆	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	清水照行	合科的指導研究・実践の現状	理科教室	19 15	12	1987	八	寺尾健夫	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	寺尾健夫	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	理科教室	19 15	12	1987	八	宇原 浩	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	宇原 浩	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	理科教室	19 15	12	1987	八	坂垣 基	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	坂垣 基	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	理科教室	19 15	12	1987	八	伊東裕一	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987
1987	八	伊東裕一	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	理科教室	19 15	12	1987	八	江田和生	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討	月刊教育ジャーナル	42	8	1987

1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	上越市大手町小	基本的行動様式や自己認識の育成をめざして				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	押井智久	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	川上昭吾・広瀬正美・村井健夫・橋本健夫・中村重夫	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	岐阜大学附小	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	黒野弘一・平原崇・吉田智彦・千葉雅夫・松本史郎	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	斎藤 誠	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	宮井啓之	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	武村重和・片山俊行	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	奈良女子大学附小	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	横浜市日枝小	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	平谷浩文	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	深沢五郎	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	藤里和之・吉岡潤洋	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	佐藤和広	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	岡山市芳明小	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	三上周佑	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	八木 哲	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	横石政樹	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	吉田昭次郎・小林清一	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987
1987	七	島海公・堀内一男・多田順一・二谷貞夫	生活体験	理科教室	26 30	7	1987	七	米田昭次郎・小林清一	「生活」を使うものを作る」の実践像とその検討				1987

一九八八	八	工藤隆雄 能谷光男 小林鏡夫 酒井久美子 坂田美由紀 坂井正美 澤田光蔵・山根美津子 田中幸夫 出井幸夫 永井正子 中島立美 中野重人 正岡義憲 宮島和子 宮島和子 山井隆 山脇健 古田豊 学校運営研究 相原芳徳 伊藤保 益地勝志 大竹正	<p>一、学校めぐり 二、学校を楽しくしよう わたしの学校(六時間)</p> <p>四、雨の日を楽しくすごそう(六時間)</p> <p>一、ぼくらは町のたんけん隊(一) (五時間)</p> <p>一〇、冬のくらしを調べて楽しくしよう(九時間)</p> <p>七、あきのこうえんへ行こう(二) (三時間)</p> <p>一、おもちゃを作って遊ぼう(二) (二時間)</p> <p>五、夏がきた(五時間)</p> <p>七、収穫を祝う秋祭りしよう(二) (二時間)</p> <p>六、草花や生き物をかわいがろう(九時間)</p> <p>八、バスに乗って相模原公園へ(探検に) 行こう(二) (二時間)</p> <p>一、もうすぐ一年生(二) (三時間)</p> <p>八、あそびものをつくろう(二) (二時間)</p> <p>二、野菜を育てよう(六時間)</p> <p>六、野菜を育ててとり入れしよう(二) (二時間)</p> <p>二、わたしのアルバム(九時間)</p> <p>五、夏を乗りもう(二) (二時間)</p> <p>三、わたしたちの水をくまを作ろう(七時間)</p> <p>特集：『生活科』に向けて経営課題はどこか 一年の『生活科』年間計画と研究のポイント 現実にマッチした機能性 生活科設計図づくり 学校経営全体の見直しポイント 環境と自分との一体的とらえと自己認識の困難</p>	学校運営研究	27	三四四
------	---	---	--	--------	----	-----

一九八八	七	季刊教育法 市川博 小佐野正樹 木村広男 大越敏行 山口金司 高野尚好 中野重人 初等理科教育 一九八八 七 坂垣 慧 倉沢達雄 椎名 仁 庭野正和 一九八八 七 津幡達夫 一九八八 七 石井建夫 一九八八 七 初等理科教育 一九八八 七 浅田 宇 安藤雅之 和泉功平 坂垣 慧 益地勝志 鎌木良夫	<p>特集：『生活科』を解剖する 生活科の新設と今後の課題 「生活科」は子どもに科学的認識を育てるか 「生活科」教科書は金太郎あめ 社会科・理科を廃して「生活科」とは 「生活科」の授業への取り組み(最終回) 生活科とはどんな教科書です 新教育課程「こがしりた」生活 特集：生活科の単元づくり(その二) 子どもの「生活科の創造」 二期の重点プラン(二) 学年 視点 二期の重点プラン(二) 学年 講座・生活科をふまえた低学年理科の指導とその実践 実践一四、こうえんふしぎはつけん 第六回歴教協中間研究会 報告二 「生活科」→「社会科」→「地理科」→「公民科」構 想と主権者を育てる社会科の課題 特集：生活科 年間計画とその実践 四、公園へ行こう(九時間) 九、ぼくの家族・わたしの家族を招待しよう(二) (三時間) 三、草花や生き物を育てよう(九時間) まがきき 生活科年間指導計画とその実践 九、〇〇さんに手紙を出す(九時間) 〇〇冬を元気に楽しくすごそう(二) (四時間)</p>	季刊教育法 教育研究 月刊教育ジャーナル 小学校教育 初等理科教育 理科の教育 歴史地理教育 初等理科教育	22 8	37 7	22 1 27 43 7 4 5 7 二〇三七 二六六	七三
------	---	--	---	--	---------	---------	--------------------------------------	----

一九八八	八	木下邦太郎 高橋系裕 寺節信之・新見謙太・ 羽豆成二ほか 一九八八 八 高野尚好 武内恒夫 一九八八 九 清水康行 馬場久志 一九八八 九 上田 薫 一九八八 九 社会科教育 石井和生 石橋昌雄 上床美嗣 内山隆 小田原誠 龜島敬司 木内尚赤 北俊夫 小林信郎	<p>幼植園教育から生活科を考える 座談会「生活科の理念と構造をどう視るか(その一)」 講座・生活科をふまえた低学年理科の指導とその実践一五、夏に育てる 生活科とはどんな教科書です 方法的能力「育てる」を見る」を伸ばす授業(1) 単元「大きくあわれ」(二年)―生活科・授業を拓く)― 「生活科」に関する疑問点 「生活科」構想と低学年の発達課題 政治と教育の間―社会科の運命はなにをもがたるか 特集：『生活科』がはじまる―社会科研究のポイント 学習のし方の指導―どこがどう変わるか 調査活動の指導―どこがどう変わるか 一年の教材づくり―どこがどう変わるか 観察活動の指導―どこがどう変わるか 生活科は、まさに右脳教育だ 「学校めぐり」をしよう―学習活動例とその発展教材について 生活科のイメージに迫るために 生活科の学習体験を生かす カリキュラムの作成と社会認識の新しい構造化を</p>	視点の教育 月刊教育ジャーナル 学校教育 考える子ども 教育 教育学研究 社会科教育	27 37	6 8	八五四 一八一 四九九 三二四
------	---	--	--	--	----------	--------	--------------------------

一九八八	八	小倉晋久治 加藤明 上塚昭三 小林毅夫 坂本良一 坂井正美 澤田光蔵 澤本和子 静岡南都小学校 末松公徳 鈴木登澄 高岡浩二 高木達朗 高谷 秀 田口 生 谷 友雄 中野重人 日台利夫 宮本三郎 石田秀孝 中野重人 初等理科教育	<p>山行地域に立脚した設定と実践 子どもの創からいかに授業を構成していくか 体験を通し追究し続ける子を願って 低学年教育全体の見直しポイント ねらいが十分に生かされる指導計画の作成 二年の「生活科」年間計画と研究のポイント 学ぶこと生かすこと―一体化をめざした実践計画の確立を 期待・希望そして不安・懸念から確かな手ごたえ へ 指導計画誕生への苦しみ 地域特性・具体的活動や体験の積みでたカリキュラム開発を 非言語的認識のために 「生活科」の基本理念は何か 個性が生かせる五つの場づくりをめざして 「生活科」実践と予想される課題と対策 一人ひとりの子どもから出発すること重視 中学校への橋渡し問題のポイント 「生活科」―歴史的背景を探る 「生活科」―関連文献と実践研究学校一覽 校内研修のプログラムづくりのポイント 方法的能力「比べる」を伸ばす授業―単元「お手つだい」―(生活化・授業を拓く) 新教育課程「こがしりた」生活 特集：生活科を縦軸・横軸から見る</p>	小学校教育 小学校教育 初等理科教育	22 1 9 5	八五三 二六八
------	---	---	---	--------------------------	-------------	------------

一九八八 〇〇	友野重紀 浅田学・波多野久夫 高野高好 中野重人	「生活科」のねらいと養生の経緯 教科のねらいとかが違うか 合科的イメージからの脱皮と新教科の独自性 「生活科」研究からの文献参照 生活科としての物の製作 ねらいの具体化をどう進めるか 活動のさせ方とかが違うか 活動が深まる単元構成の研究 二年の単元構成を比較検討する 二年の単元構成を比較検討する 問題解決的学習指導の実践 今「子ども」が運営する実験観察に転換を 一年の単元構成を比較検討する 遊び方を工夫し楽しく遊ばす子どもに育てる 教科の系統性をどうするか 問題解決の能力をどのように生かしたらよいか 育てる能力とかが違うか 二年の素材教材を比較検討する 講座：生活科をふまえた低学年理科の指導その実 践①六、生活科を育てよう 方法的能力「育てる」「見る」を伸ばす授業②― 単元「大きくなあれ」「一年」―生活科・授業を 拓く	理科の教育 学校教育 月刊教育ジャーナル	37 9	八五五 四八九
------------	-----------------------------------	--	----------------------------	---------	------------

一九八八 二二	加藤明 北尾倫彦 堺市「生活科」研究グループ 藤井千恵子 村松邦崇 小林典郎 大多和紀之	個性を育てる生活科の授業づくり 生活科の授業のあり方 子ども自らの活動が連続・発展する生活科 講座：生活科をふまえた低学年理科の指導とその 実践①八、公開に行こう 教育課程講座資料をどう読むか―生活科は教科 として成り立つのか？ 「生活科」をめぐる問題と対応策 「んげん」の楽しさを味わわせる生活科の授業 ②「単元」が「こうたんけん」生活科・授業を 拓く 生活科とはこんな教科です 小学校指導要領・社会はどうか変わるか―九、なぜ生 活科なのか―二世紀への教育を求めて 文部省から出された「生活科活動参考例」(二年) 「」が知りたい 「」が校の生活科研究②「気づき、はたらきかけ る子どもを育てて」 新教育課程「」が知りたい―生涯 教育②生活科の授業づくり(その二) 一年「いえをつくろう」 二年「おもちゃを作ってみよう」 視点 生活科の授業づくりの原則 講座：生活科をふまえた低学年理科の指導とその	理科の教育 月刊教育ジャーナル 学校教育 歴史地理教育 学校運営研究 小学校教育	37 27 25 27	四三六 四三四 四四八 三七八
------------	--	---	---	----------------------	--------------------------

一九八八 九九	小林宏巳 佐藤祥巳 佐藤幸子 清水毅四郎 末政公徳	子どもに賢く社会認識力への着目 両教科構成の異同点と変らない社会認識 二年の教材づくりとかがどう変わるか 「生活科」関連の文献資料の紹介 低野野止て無くなったもの、取扱いが変わったもの をどうするか 生活科の中、高学年への進展へのかき 生活科のねらいと養生までの経緯 児童が意欲をもって活動や体験を行える手立て より初期社会科の理念に近づける方向を もがったふりにかかわってゆかざるをえなくえる ような社会科授業の構成 表現活動の指導「」がどう変わるか 自己認識の指導「」がどう変わるか 社会認識の指導「」がどう変わるか 生活科の活動参考例(文部省)など資料と解説 「生活科」ではなにをどのようにしつけるのか 新教育課程「」が知りたい―生活 科授業：望ましい生活科の実践 視点 教材優先による生活科構想 座談会：授業の質の転換 理念は正しく実践の関口は広く 特集：「生活科」が始まる。理科研究のポイント 一年の素材教材を比較検討する	小一教育技術 小学校教育 初等理科教育	22 1 1 10 6 6	二六九 二五三
------------	---------------------------------------	--	---------------------------	------------------	------------

一九八八 〇〇	中野重人 無藤隆 高野高好 田中力 新見謙太 藤本 哲 中野重人 佐藤慶子 森 隆夫 中野重人 石川保徳 中野重人 「小学校理科研究」編集委員会 初等理科教育 梅本隆司	昭和六三年度小学校教育課程講習会資料「生活科」 全文 新教育課程「」が知りたい―生活 生活科における体験的活動の役割はなにか 特集：生活科の単元づくり(その三) 第三学期の単元づくりのポイント―社会科の経験 を生かして 二年生の単元づくり―二期の重点プラン 視点 一年生の単元づくり―二期の重点プラン 特別企画「」がポイント「生活科」 講座：生活科をふまえた低学年理科の指導とその 実践①七、みりの秋 「んげん」の楽しさを味わわせる生活科の授業 (1)「単元」が「こうたんけん」生活科・授業を 拓く 新教科の視点と展開について 生活科が家庭教育を活性化 文部省から出された「生活科活動参考例」(二年) 「」が知りたい 生活科における地域の捉え方と生かしか方 小学校教育課程「」が知りたい―生活 科授業：望ましい生活科の実践 小学校理科「」がわかる 特集：生活科の授業づくり(その二) 視点	総合教育技術 理科の教育 月刊教育ジャーナル 小学校教育 小学校理科研究 初等理科教育	37 43 10 10 22 1 1 12 8 8 8	四三五 八五六 二七〇 二七一
------------	--	---	--	--------------------------------------	--------------------------

資料 6 冊
シンポジウム
「生活科の授業」をどうつくるか
実施要項より

◆主催 連続セミナー「授業を創る」
 ◆後援 『授業研究』『社会科教育』『理科教育』編集部
 ◆日程 1988年12月4日(日) 9:30~17:00
 ◆会場 東京都中央区立城東小学校
 〒104 東京都中央区八重洲2-1-2
 ☎(03) 281-0401
 ◆交通 J R 東京駅八重洲口下車 徒歩1分
 ◆プログラム

☆受け付け	8:30~9:30
☆基調報告	9:30~10:00
☆講演	10:00~10:50
☆講演	11:00~11:40
☆討論	11:40~12:10
☆実践報告	13:10~14:50
☆トーク&トーク	15:00~17:00

◆参加費 (資料代含む) 2,500円 当日お払い下さい。
 ◆問い合わせ・申し込み 「連続セミナー授業を創る」事務局
 〒260 千葉市秋台町664-132 谷川方
 ☎(0472) 51-2228

一九八九	三	理科教育
藤本泰雄	中谷内政之	小林毅夫
笠原 始	大西秀夫	益地勝志
生田一人	生田一人	生田一人
特別：改訂学習指導要領「理科」研究の要点	理科教育	理科教育
生活科二年・研究課題は「こた」体験を広げ、自分を見つめる目を育てる生活科に		
生活科二年・研究課題は「こた」自然とのみずみずしい交流をこそ		
生活科の新設に伴う理科の再編成・実践研究のポイント		
生活科一年・研究課題は「こた」単元の目標と活動スタイルの明確化		
生活科一年・研究課題は「こた」子どもの自立をめぐらして		
生活科一年・研究課題は「こた」評価をいかにすべきか		
二六〇		